

V. ウルフにおけるモダニズム覚え書

山内藤子

「現代は断片の時代」¹であり、「不毛の疲れきった時代」²であると言ったウルフは、確かにモダニストの一人である。絵画、音楽、文学とあらゆる分野に見られるモダニズム文化であるが、イギリス文学に限れば、ジョイス、T.S.エリオットの次にウルフが上げられるであろう。

総括的名称であるモダニズムを定義することはむずかしいが、年代的に広くは、1880年位から1950年位までを考え、第一次大戦後急速に開花したとするのが、概ねの解釈であろう。³特にイギリス文学について言えば、『ユリシーズ』『荒地』『ジェイコブの部屋』がそろって出版された1922年は、モダニズム文学が頂点に達した年と言えるであろう。モダニズムの内在的な特徴を大石俊一氏は(1)強烈な時間意識と歴史意識、(2)文化全体への否定的、創造的な問いなおし、(3)亡命、国外追放、無国籍性、根なし草性、コスモポリタニズム、インタナショナルイズム、(4)徹底的、意識的方法意識、ときに頭腦的でさえある知能的創作方法、(5)芸術への専心的献身、ハイブラウの人生態度、とまとめている。⁴ウルフの小説を読んだ者なら、この中のいくつかの特徴はすぐに思い浮かぶことであろう。たとえば、作品の随所に現れる内的時間と外的時間の流れ、『オーランド』や『幕間』における歴史観、さらにダロウェイ夫人やラムジー夫人の属するハイブラウな世界などである。また、評論「現代の小説」と「ベネット氏とブラウン夫人」では、ウルフのモダニストとしての基本的な考えが、前述の(2)や(5)の特徴を示しながらははっきりと書かれている。周知の通り、1919年に発表された「現代の小説」でウルフは、ウェルズ、ベネット、ゴールズワージーを「物質主義者」と呼び否定し、小

説とは「人生そのもの」を描くことであり、それには人間の内面をできるだけ忠実に描くことが必要だと述べている。そして従来の小説手法では、それは不可能なので新しい手法が必要なのだと力説している。1924年に発表された「ベネット氏とブラウン夫人」の中では、「1910年、12月ごろに、人間の性格が変わった」と述べ、ロンドンで開催された後期印象派展が、人々の意識の変化を象徴していることを指摘している。そしてベネット氏をはじめとするエドワード朝作家を否定し、小説は性格を表現する、すなわち人間の内面を描くことで、真実に通じると述べるのである。このような考えを基にウルフは、新しい手法による『ジェイコブの部屋』さらに『ダロウェイ夫人』を書き、次々に小説を発展させていったのである。

ここでは、他のモダニストとのかかわりに焦点をあて、批評、日記、手紙、伝記を考察することで、ウルフのモダニズムの一端を探ってみたい。

まず、モダニズム文学の源の一人と考えられるJ. コンラッド (1857～1924) について調べてみたい。ウルフは、コンラッドの小説を大変愛読しており、「対話：コンラッド氏」(1923) と「ジョーゼフ・コンラッド」(1924) の二つの評論を書いている。後期の作品に少々の不満は持ちながらも、彼を「天才」と呼び“... he is a great writer! A great writer!”⁶ と作中人物に言わせている。また、「ベネット氏とブラウン夫人」の中では、新しい小説を書こうにも1910年ごろには、見習うことのできる作家がいなかったとしながら次に、「コンラッド氏はポーランド人です。そのため彼は別であり、いかに立派であっても、彼はあまり役に立ちません。」⁷ と書いている。ウルフはコンラッドを外国人と意識しながらも、その作品に多いなる敬意を払い、新しい小説のある型を認めていたことがわかる。小説『船出』と『歲月』の中に、コンラッドの代表作

のタイトルでもある「闇の奥」('the heart of darkness')ということだが、そのまま出てくることも意味深く思われる。

近代心理小説の巨匠と呼ばれる、H. ジェイムズ (1843~1916) とウルフの出合いは、ウルフの幼少の頃へとさかのぼる。ウルフが10歳の頃から夏を過ごすことになった、セント・アイヴズのタランド・ハウスに、ヘンリー・ジェイムズは父の友人として出入りしていた。父の死後は、会うことも少なくなったが、1908年の手紙には、ライに落ちついていたジェイムズにお茶を招かれたことが、記されている。

ウルフは、10代の頃からジェイムズの作品に親しんでおり、1905年に *The Golden Bowl* の書評、1917年に *The Middle Year* の書評、さらに1920年には、彼の書簡集の書評「ヘンリー・ジェイムズの書簡」を書いている。「ヘンリー・ジェイムズの書簡」の中でウルフは、「『無限の感受性』の所産であるあまたの作品には、ことごとく、芸術形式の最後の極印が打たれている。」と評している。また1922年に書かれた評論「小説の再読について」の中には、次のような箇所がある。

... Henry James achieved what Richardson attempted. "The only real scholar in the art" beats the amateurs. The latercomer improves upon the pioneers.⁹

このようにウルフは、ジェイムズの小説技法を大変高く評価しており、ウルフが小説を書く上でも、多くを学んだであろうことは容易に考えられる。

また、1905年、レナード・ウルフはリットン・ストレイチー宛の手紙に「今ちょうど『黄金の盃』を読んだところだが、ひどく驚いた。彼がわれわれを作ったのだろうか、それともわれわれが彼を作ったのか。」¹⁰と書き送り、ヘンリー・ジェイムズのブルームズベリーグループに対する影響の強さに驚いている。

このように、後に続く多くのモダニストに影響を与えたジェイムズで

あるが、彼が人物の感情や思考を分析するのに用いた文体の繊細さは、ウルフの意識の流れにも大きく影響したと思われる。

ウルフが個人的に面識のあったもう一人のモダニストに、T. S. エリオット（1888～1965）がいる。彼は1918年11月に、ホガースハウスに自分の詩をいくつか持ってやって来た。その時のことを日記に、ウルフは次のように記している。

... it is fairly evident that he (Eliot) is very intellectual, intolerant, with strong views of his own, & a poetic creed. I'm sorry to say that this sets up Ezra Pound & Wyndam Lewis as a great poets, ...¹¹

ウルフはエリオットの知性を見抜き、文学的意見に異なるものはあったが、彼の詩をホガース・プレスで出版することに決めた。さらに1922年には、銀行勤めのエリオットを助けるために、ウルフは「エリオット交友基金」を設立した。このようにして、ウルフとエリオットの交友は終生続くことになり、エリオットは他のブルームズベリーの仲間にも友人を見い出している。

ウルフとエリオットは、しばしば手紙を書いたり会う中で、文学を語りお互いを刺激し合っていたようである。たとえば1922年、ジョイスの『ユリシーズ』が発表されたが、ウルフはこれを「不発の作」「下品」¹²と評した。それに対しエリオットは、『ユリシーズ』を賞賛したため二人の間で、貴重な議論が戦わされた。また、ウルフの短編「月曜日か火曜日」、実験的小説『ジェイコブの部屋』をエリオットは賞賛し、ウルフを喜ばせている。一方ではエリオットに対してウルフはライバル意識も持っていたようであり、日記に「マリとエリオットに注文がきたが、私には来ない。」¹³や「エリオットの評判は、私のよりもはるかに高い。」¹⁴といった記述が見られる。

1922年に「クライテリオン」に発表された「荒地」についてウルフは、“It has great beauty & force of phrase: Symmetry; & tensivity.”¹⁵と、大変

感銘を受けている。しかし、「ベネット氏とブラウン夫人」の中では、エリオットの詩を「晦渋」であるとし、「彼は社交上の古い慣習や礼儀——弱いものに対する関心、鈍いものに対する思いやり——についてはなんと狭量なのでしょう！」¹⁶と不満も述べる。このことについては、新しい文学に向う現象としては避けがたいことだとし、結局エリオットの詩を認めるのである。つまり、ウルフとエリオットの向っていた方向は同じなのであるが、細かい表現や手法の点ではエリオットに賛成できずウルフは独自のものを目指していたと思われる。

もう一人のライバル、J. ジョイス (1882~1941) とは面識こそなかったが、その作品には多いに刺激され、また愛憎入り混じった意見を持っていた。

ジョイスの作品は、すでに1917年頃からウルフは読んでいたようであり、またブルームズベリ・グループの間でも、ジョイスの小説は話題になっていた。さらに1918年4月に、『ユリシーズ』出版の話がホガース・プレスにもたらされた時、ウルフは大いにとまどった。発表途中であった『ユリシーズ』についてウルフは、嫉妬心をかきたてられるほどに感嘆しながらも、同時にそれが、「まるで彼女自身のペンを誰かが彼女の手から奪って便所の台にいかがわしいことを書いた」¹⁷ものようにも感じられいやな気がした。結局、ホガース・プレスの技術では無理な仕事であるため、出版はあきらめることになった。

「リトル・レビュー」に掲載されていた『ユリシーズ』をウルフは、その後も読んでいたが、「現代の小説」の中でさっそくジョイスに対する批評を行っている。ウルフは、「ジョイス氏は精神主義者 (spiritual)」¹⁸であり「われわれがもし人生そのものを求めているとしたら、たしかにユリシーズにはそれがある。」¹⁹と認める一方、「ジョイスの精神は比較的貧し」²⁰く、作品は「輝やかしいけれども手狭な部屋に、解き放たれるのではなく因われ、幽閉されている」²¹ような感じを受けると、批

判している。さらにこの欠点は、ジョイスの用いている手法によると考え、人生を描くにはもっと適切な手法があるはずだとウルフは、述べている。また1922年9月6日の日記では、ジョイスは“wits and powers”²²はあるが、“self-conscious and egotistical”²³であると欠点を指摘している。

「人生そのもの」を描こうとした点では、路線を同じくするジョイスを認めながら、その描き方、手法にウルフは疑問を持っていた。このように『ユリシーズ』を批判しながら、触発もされ、自らの手法を求めウルフは、1920年4月より『ジェイコブの部屋』の制作にかかった。制作中、「私のやっている仕事を、ジョイス氏がいちばんうまくやっているだろう。」²⁴ と思って沈み込んだりもする。

1922年8月にオトリン・モレルに宛てた手紙の中にジョイスとジェイムズを比較する興味深い箇所がある。

I mean if you could weigh the meaning on Joyces page it would be about 10 times as light as on Henry James'.²⁵

前述したように、ウルフはH. ジェイムズの小説技法を高く評価しており、ここでもジェイムズに比らべるとジョイスの文学には、さほどの意味を見い出してはいないようである。

ウルフが何と言っても一番尊敬し、理想としていたモダニスト作家は、ブルースト(1871~1922)に他ならないであろう。日記、手紙、評論における彼に対する記述は、全てが賞賛と敬意のことばである。

1918年にフランスよりロジャー・フライが帰国した際、ブルームズベリ・グループにもたらした重要な文学情報は、ブルーストについてだった。同じ年の4月のウルフの日記には、フライがブルーストの文を読み、次に訳しながらフランス文学について語ったことが記されている。ウルフは、フライやフォスター宛の手紙に、ブルーストについてのことをよく書いているが、1922年5月のフライ宛の手紙には、「ブルーストの

ように書けたらどんなによいだろう』²⁶と嘆いている。また、1927年には姉、ヴァネッサに宛てて、“... he is far the greatest modern novelist.”²⁷と書き送っている。

評論「小説の再読」では、ヘンリー・ジェイムズの後に続く作家としてブルーストを上げ「ロレンス覚え書」では、ブルーストと比較することで、ロレンスの欠点を明らかにしている。また、『私だけの部屋』の中では、偉大な作家はみな両性具有であるが、現代作家では、ブルーストがそうだと述べている。ウルフにとってブルーストは、まさに偉大な存在だったのである。

モダニズム文学には、フレイザーやハイデッガーなど多くの思想家が、影響を与えているが、その中の一人フロイト（1856～1939）を最後に取り上げたい。

ウルフは1932年、手紙の中で、自分はフロイトを勉強したことも、その著作を読んだこともないと言っている。しかし、本格的な勉強こそしなかったかもしれないが、ウルフにはかなりの知識はあったと思われる。1918年の日記にはリットン・ストレイチーと、フロイトに関する話をしたことが記されている。又、1920年代前半に、ウィーンでフロイトに師事していたジェームズ・ストレイチーは、ブルームズベリー・グループの主要メンバー、リットン・ストレイチーの弟であり、ウルフとも親しい。さらに1920年にウルフが書いた評論‘Freudian Fiction’は、フロイト理論を知らなければ書けないものである。このようにかなり早い時期からウルフはフロイトの存在・理論を知っていたのである。

さらに重要なことは、1924年、ジェイムズ・ストレイチーの勧めで、ホガース・プレスがフロイトの著作を出版することになったのである。そして1939年には、フロイトに個人的に会ってもいる。晩年になるが、1939年に、フロイトの著作 *Moses and Monotheism*、1940年に *The Group Psychology* が読まれることも手紙などで明らかである。

ウルフにとって、フロイトはかなり身近な存在であったことは確かであろう。

以上述べてきたように、当然のことながら、ウルフは孤立して小説を書いていたわけではなく、多くの他のモダニストの作品を読み、何人かとは個人的なつき合いもあったのである。ハイブローな知的集団である、ブルームズベリー・グループが、ウルフに多方面にわたるモダニズム思想を吹き込んでいたことも、まちがいない。ホガース・プレスの果した役わりも大きく、1920年前後における、エリオット、ジョイスとのかかわりは、ウルフに大きな衝撃を与えたと思われる。

そうした中でウルフの中にはぐくまれたモダニズムは、エリオット、ジョイスに共通するものではあったが、それを表現する手法に関しては、二人とは違った独自のものをウルフは模索していたのである。Naremore が、ウルフの同時代人に対する関係には、“Paradoxical” などところがある²⁸と述べているのもこの点を指していると思われる。

ウルフの理想は、プルーストであったろうし、また根底にはコンラッドや H. ジェイムズの文学が、生きづいていたと思われる。様々な思想家の影響も、あったであろう。ウルフは、モダニスト達との接触の中でモダニズムの方向を確信し、自分に適した表現方法を追って、『ジェイコブの部屋』以降書き進めていったのである。

このような見地から、作品を詳細に検討する必要があると思うが、これについては今後の課題としたい。

(注)

1. Virginia Woolf, “How it strikes a Contemporary” in *The Common Reader: First Series* (London: The Hogarth Press, 1925), p. 296.
2. *Ibid.*, p. 298.

3. Frank Kermode, *Continuities* (Routledge & Kegan Paul, 1968), p. 3～5 参照.
4. 大石俊一『「モダニズム」文学と現代イギリス文化』(文化社, 1979), p. 20.
5. Virginia Woolf, "Mr. Bennet and Mrs. Brown" in *The Captain's Death Bed and Other Essays* (London: Hogarth Press, 1950), p. 91.
6. Virginia Woolf, "Mr. Conrad: A Conversation" in *The Captain's Death Bed and Other Essays*, p. 75.
7. Virginia Woolf, "Mr. Bennet and Mrs. Brown" p. 99. (訳は朱牟田房子氏による)
8. Virginia Woolf, "The Letters of Henry James" in *The Death of The Moth* (London: Hogarth Press, 1942), p. 100. (訳は大沢実氏による)
9. Virginia Woolf, "On Re-reading Novels" in *The Moment and Other Essays* (London: Hogarth Press, 1947), p. 133.
10. Quentin Bell, *Virginia Woolf: A Biography* 訳: 『ヴァージニア・ウルフ伝 I』黒沢茂 (ちすず書房, 1976) p. 317.
11. Virginia Woolf, *The Diary of Virginia Woolf vol. 1* (Harcourt Brace Jovanowich, 1979). pp. 218～219.
12. Virginia Woolf, *A Writer's Diary* (London: Hogarth Press, 1953), p. 49.
13. *Ibid.*, p. 14.
14. *Ibid.*, p. 308.
15. Virginia Woolf, *The Diary of Virginia Woolf, vol. 2* (London: The Hogarth Press, 1978), p. 178.
16. "Mr. Bennet and Mrs. Brown" p. 109.
17. 『ヴァージニア・ウルフ伝 2』 p. 89.
18. Virginia Woolf, "Modern Fiction" in *The Common Reader: First Series*

- p. 190. (訳は大沢実氏による)
19. *Ibid.*, p. 191.
 20. *Ibid.*, p. 191.
 21. *Ibid.*, p. 191.
 22. *A Writer's Diary* p. 49.
 23. *Ibid.*, p. 49.
 24. *Ibid.*, p. 28.
 25. Virginia Woolf, *The Letters of Virginia Woolf vol. 2* (London: Hogarth Press, 1976), p. 548.
 26. *Ibid.*, p. 525.
 27. *Ibid.*, vol. 3, p. 365.
 28. James Naremore, *The World Without a Self: Virginia Woolf and the Novel* (Yale Univ. Press, 1973) p. 75.